

二〇二二年三月二日

母の里訪ふがならひや木の芽時  
菜の花の鐵路が続く海岸線  
春眠の言ひわけ数多生れにけり  
指太き夫も土筆の袴取り  
靴紐を結びなおせばすみれ草  
介護謝す誕生ケーキあたたかし

菜々  
素秀  
あひる  
なつき  
たか子  
やよい

二〇二二年三月一日

春陰やいまだ手付かずてふ除染  
花柄の杖もて散歩春うらら  
鎮魂の一本松に春立ちぬ  
白木蓮の天へ乾杯全開す  
消えさうで消えぬ蠟燭春の風  
古雛仲良くのぞく老夫婦  
十年なる鎮魂の沖風光る  
蘂のひと芽ひと芽に力あり

せいじ  
満天  
凡士  
はく子  
素秀  
なつき  
やよい  
みきお

二〇二二年三月一日

花博の跡地と札や犬ふぐり  
島ぢゅうで祝ふ最後の卒業式  
崑ちゃんの看板立てて村長閑  
鉄棒にぶらさがり見る春夕焼  
春の日を弾く畝間の潦  
駐車場残りし雪を籬とす  
初蝶来観音像の掌に

せいじ  
凡士  
明日香  
素秀  
明日香  
こすもす  
ぼんこ

二〇二二年三月九日

海に向く崖に水仙なだれ咲く  
千枚の田の果て春の海に落つ  
挙げし爪海より青し汐まねき  
川底に動くもの増え水温む

こすもす  
凡士  
素秀  
満天

雑木道左右のなぞへに藪椿

もとこ

待合のマスクの患者鶴を折る

なつき

近道は凸凹の畦草萌ゆる

うつぎ

二〇二二年三月八日

ふらここに投出す靴の白きかな  
川浴ひを白一色に雪柳  
明日嫁ぐ子の部屋窓春夕焼  
水琴窟手水に応へ春奏づ  
初音をば存問と聴く朝かな  
搗く鐘の音も攫はれ春一番  
目を凝らす微かに動く蜷の道  
春水を鯉の背鰭が二夕分けに

素秀  
満天  
邑  
智恵子  
うつき  
凡士  
やよい  
豊実

二〇二二年三月七日

夫婦してパズルに無口春炬燵  
外されし薦に蠢く地虫かな  
鉄砲のやうに潮吹く浅利かな  
磐石の凹みにひとつ落椿  
存分に春の風吸ふ象の鼻  
春の水不動にかけて句碑めぐり  
田園を聴いて微睡む春の昼

たか子  
やよい  
あひる  
みきお  
凡士  
凡士  
音吉

二〇二二年三月六日

大玻璃が吾と春霖隔ており  
牧開夕日に伸びる牛の影  
連理なす神の大杉春日燦  
火の影に揺るる小面薪能  
格子より清きかんばせ雛めぐり

あひる  
素秀  
明日香  
素秀  
もとこ

毎日句会みのる選・二〇二二年三月一四日